

大遠忌の歩みと その時代

第一回 戦国から現代まで

大遠忌が明確な史料で確認できるのは

三〇〇回忌からです。それ以前の二〇

〇・二五〇回忌は天明三年（一七八三）

玄智が編纂した『祖門旧事記』にみえま

すが、江戸時代の史料ゆえ、当時の事実

かどうか確証はありません。さらにそれ

以前の回忌はまったく不明です。

確実な三〇〇回忌から、以後の大遠忌

と時代を照らし合わせると、三〇〇回忌

が戦国時代、三三三〇回忌が江戸

時代、六五〇回忌と七〇〇回忌が近現代

となります（大遠忌略年表参照）。

三〇〇回忌は顕如宗主の時代で、宗

主が門跡となった二年後に当たります。

大坂に寺基を置く本願寺について、宣教

師ガスバル・ビレラは、永禄四年（一五

六二）八月十七日の報告で、本願寺は与

える金銀が多く、日本の富の大部分は

「此坊主（顕如）の所有」と表現してい

ます。戦国時代に一大勢力となった段階

での大遠忌でした。

准如宗主の代には、三三三三回忌、三

五〇回忌が修されます。三三三三回忌とは

あまり馴染みのない大遠忌ですが、当時

の記録が伝来するので、修されたのは事実です。なおこの記録が大遠忌史料の中で最も古い史料です。前年の兄教如宗主の隠居により、准如宗主が継職したことを示すため、修されたものと思われる。

豊臣秀吉没後、徳川家康は諸大名の統制を計り、豊臣政権との対立を顕然化させます。教如宗主は隠居後、家康と接近。家康は慶長七年（一六〇二）教如宗主へ寺地を与え東本願寺を別立させます。したがって三五〇回忌は東西分派後、初めて両本願寺で修される大遠忌となりました。三五〇回忌はまさに豊臣政権と徳川権力の対立の中で修されたのでした。この数年後、大坂の陣で豊臣氏は滅亡、大遠忌は徳川政権下で厳修されています。

四〇〇回忌は良如宗主の代です。この時代は徳川政権下で一定の社会的安定を保った時期でした。法会厳修の二カ月前の正月十五日京都大火で御所・公家屋敷などが焼失します。これに先立つ明暦



本願寺史料研究所に保管される江戸時代の大遠忌史料群（部分）

三年（一六五七）には明暦の大火で江戸の大部分が焼失、法会翌年五月には京都大地震が生じ、両堂の尊像を避難させる事態にもなりました。安定した社会の中で繁栄する都市、それは災害が生じれば被害が甚大となることを意味していました。大都市の京都の繁栄と危険の中で、

本願寺は大遠忌を盛大に厳修していくことになるのです。

四五〇回忌は寂如宗主の代です。この時代は繁栄した元禄時代が過ぎ、徳川政権のひずみが露呈し始めた時期です。五代將軍徳川綱吉の政治に終止符が打たれ、新井白石の正徳の治の開始と失敗、そして八代將軍吉宗の享保の改革が実施されます。この法会における斎・非時相伴の院家・余間などの人数の通計は一万二三五二人で、その盛大さが推察されます。経済的にも安定した最後の時代の厳修といえます。

五〇〇回忌は法如宗主の時代です。この時期は徳川政権に矛盾が生じ、社会的に不安定な時代に入ります。大遠忌の三年前、京都では竹内式部が天皇・公家に尊王論を説き、幕府に処罰された宝暦事件が起りました。これは幕末に続く尊王派公家活動の端緒で、朝幕関係の対立構図の始まりです。法会にはその公家の皇太后青綺門院より萌黄地緞子戸張や関白以下諸公家から和歌の奉納などを受

け盛大に執行されました。

五五〇回忌は本如宗主の代です。この時期は徳川政権の矛盾がついに露呈し、幕府や藩財政は破綻、大改革の時代に入ります。本願寺も同じく財政は破綻状態に陥り、法会後の文政十二年（一八二九）には負債が「六十万両」（約二四〇〇億円）に達していました。加えて本願寺は宗学上の対立、三業惑乱、興正寺独立事件などが同期に集中しており、困難の中の厳修でした。

六〇〇回忌は広如宗主の代で、ペリーの来航と開国、幕府と雄藩との対立が激化、ついには法会前年に大老井伊直弼が暗殺されるなど、幕末の動乱期でした。本願寺はこの時期北海道開教を進め、学林がキリスト教への善処を本願寺に建白、法会三年後の禁門の変で下京は全焼、本願寺も焼失寸前でした。このように本願寺も動乱の中で明治を迎えたのでした。

六五〇回忌は鏡如宗主の代です。法会六年前には日本はロシアとの戦争に勝



700回大遠忌のポスター 堂本印象作（同研究所保管）

に派遣されました。大遠忌法要自体の拡大により、近代では法会を三月十六日と四月八日の二期に分け厳修され始めました。

七〇〇回忌は勝如宗主しょうにょの代です。この大遠忌は

敗戦後初めての大法要となりました。この時代は昭和二十六年（一九五二）日本

はサンフランシスコ講話条約を締結し、国際社会に復帰した時期でした。

御待受消息が発表された昭和二十九年（一九五四）は高度経済成長期直前で、

日本社会は大発展期に当たっていました。しかし経済成長は朝鮮戦争特需とくじゅによりもたらされた側面が強く、また同年にはビキニ諸島での水爆実験で第五福竜丸ふぐりゅうが被爆するなど、世界はアメリカとソ連を軸とする東西冷戦の中にありまし

た。

本願寺では二十一年（一九四六）戦後の新しい法規の制定と制度改革が始まり、翌年には宗主の教区・組ぐみのご巡教が開始されます。また昭和二十五年（一九五〇）には宗会議員選挙が行われ、戦後の新たな教団が着実に形成されていました。このような国内外と教団情勢のなか、七〇〇回忌は戦後の新たな時代の、新たな歩みとして、昭和三十六年（一九六二）三月に第一期、四月に第二期として厳修されたのです。

その後五十年を経て、平成二十三年四月、七五〇回忌は厳修されます。中世から現在まで数百年もの長きにわたり、時代は驚くべき変化を遂げました。しかし親鸞聖人の足跡を顕彰けんしょうし、その教えに学ぶ思いは変わることなく引き継がれています。この思いはさらに五十年、百年と未来に引き継がれていくことでしょう。

（本願寺史料研究所主任研究員 大喜直彦）

利し、大遠忌前年には韓国併合を遂げ、大遠忌の年には念願の関税自主権の回復など、大陸進出と国際的地位を向上させていました。国内では労働運動が激化し、この年には大逆事件で幸徳秋水こうとくすい他が処刑される事件も起こりました。

本願寺も日本の国際的地位の向上とともに、明治二十年代以降アジア・北米に開教を展開。組織が拡大したため、大遠忌もグローバルになり、御待受消息披露・御趣意演達のための使僧も、一道三府四十三県、樺太からふと・朝鮮・アメリカなど

【大遠忌一覧略表】

回忌	宗主	年号	月・日	出典
一〇〇	善如	正平16／康安元 (一二三六)		祖門旧事記
二〇〇	蓮如	寛正2 (一四六二)		祖門旧事記
二五〇	実如	永正8 (一五一一)		祖門旧事記
三〇〇	顕如	永禄4 (一五六二)	3・18 28	今古独語・私心記・御開山様三百御年忌
三三三	准如	文禄3 (一五九四)	3・18 28?	文禄三年日次之記・御開山様三百三十三年忌
三五〇	准如	慶長16 (一六一二)	3・18 28	慶長日記
四〇〇	良如	寛文元 (一六六二)	3・18 28	四〇〇回忌記
四五〇	寂如	正徳元 (一七二二)	3・18 28	四五〇回忌記・富島旧記
五〇〇	法如	宝暦11 (一七六一)	3・18 28	五〇〇回忌記
五五〇	本如	文化8 (一八一二)	3・18 28	五五〇回忌一件文書
六〇〇	広如	文久元 (一八六一)	3・18 28	阿弥陀堂御影堂修覆一件文書
六五〇	鏡如	明治44 (一九一一)	3・16 24第1期	教誨一瀾
七〇〇	勝如	昭和36 (一九六二)	3・10 21第1期 4・4 16第2期	勝如上人年譜